批評と紹介

ジョセフ・エシェリック編

中国的都市の再建
——近代性と国民アイデンティティ 1900—1950年

小羽田　誠治

本書は複数の研究者による分担執筆の形式をとって書かれている。同様の形式の都市論と言えば、G. W. スキナー編集による *The City in Late Imperial China*(1) がまず思い浮かべられるが、それが中国全体を対象にしたマクロな視点からの論稿を多く収録するのに対し、本書は各都市ごとにより狭く深い考察を行うことを眼目としている。時代も清末から民国にかなり限定されており、その点でも研究方法がよりミクロ化する昨今の傾向を表したものと言えるだろう。中国都市史の研究は近年日本でも盛んで研究書も数多く出版されており(2)、共同執筆という形式では上海史研究会や天津地域史研究会のものがあるが、一見してわかるように、それらはいずれも一都市に限定されたものであるため、ミクロな視点を維持しつつ様々な地域を扱った本書の存在は極めてユニークである。

本書の成果は、1996年9月にカリフォルニア大学サンディエゴ分校において開催された「上海を越えて」と題する学会に端を発している。当大学は主編のエシェリックが教鞭をとるところでもあるが、ただし執筆者はアメリカの各大学より集まっており、その世代も博士論文を提出して間もない若手から、すでに数多くの業績を残している大家まで様々である。そのフィールドは基本的には歴史学ではあるが、建築など都市の物質的な側面を多く採り上げていることも、従来にない新しさの一つである。本書の立脚点は主に次の二つにあり、一つは、共産党が政権をとって以来支配的となっていた農村中心史観から脱却し、歴史における都市の重要性を再認識すること、もう一つは、これまでの中国の都市研究に見られる上海偏重の傾向を越えて、様々な地方の都市の歴史的役割を探ることである。そして、それぞれの都市において共通して見られる「近代化」と「ナショナリズム」の協調と衝突から、中国における近代都市建設の在り方を明らかにしようとする。その具体的内容を紹介していこう。

第1章（J. Esherick, “Modernity and Nation in the Chinese City”）と最終章の第13章（D. Strand, “New Chinese Cities”）では、それぞれ第2章から第12章までの各論考を総括し、展望を行っている。古代においては画一的なプランのもとに建設されたと見られた中国の都市が、20世紀には開港都市・首都（行政都市）・内陸都市・観光都市・鉄道都市・産業都市といった様々な形態をとっていたと指摘する。しかしその一方で、各都市において行われた近代都市建設計画及びそこに顕在化する問題には共通する部分も少なくない。近代中国都市においては「新」と「旧」の対立・共存がしばしば前面に現れてきた。新政以降、政府は西洋の都市をモデルとして、衛生の改善、城壁の取り壊し、交通網の整備と拡大、公共施設の建設を到るところで進めた。そしてそれに伴い、農村民から区別された都市民アイデンティティ・都市民的行動規範が住民の意識に上るようになるという。空間的には、その社会・文化における一連の近代化が上海を中心として全国に波及したことは疑いないが、その近代性は一方で中国的アイデンティティ喪失の危惧を高め、「旧さ」をかえって中国の偉大さとして積極的に利用することもあった。もっとも、伝統は公共的な活動においてよりも、より卑俗な、小規模なレベルにおいてよく維持された。それは政府の意思に関わらず旧態依然として存続し、政策を失敗に終わらせる構造さえ存在することがあったのである。各都市の個別の歴史的経験が、以下に具体的に描かれる。

第2章（Michael Tsin, “Canton Remapped”）では広州がとりあげられる。広州は方形の城壁を持たないという点で非伝統的な都市であり、更には明確な境界を持たず、城壁の内部よりはむしろ外部において発展していた。また都市は番禺と南海の二つの県によって統治されており、都市としての統合性を欠くものであった。都市計画は存在したものの、帝政時期のそれは実践的であるよりもむしろ象徴的な意味合いが強く、いわゆる住民のための都市計画は西洋のシステムを導入しようとした清末以降にあるという。だが清末は民間の力による都市建設が中心であり、民国期に入って初めて、孫科によって空間の調査と測量が行われ、交通網・衛生の改善と公共空間の建設を骨子とする「科学的な」都市計画が進められたのである。

第3章（Ruth Rogaski, “Hygienic Modernity in Tianjin”）では天津における衛生の問題が論じられる。天津の近代化では「文明」と「衛生」がキーワードとなることがしばしばであったが、後者は単に清潔である以上に科学的であるという意味合いが込められていた。「衛生」の観念は列強が租界を有する開港都市天津では19世紀末には普及しつつあったが、仏・日・中の衛生観念及び衛生局の役割はそれぞれ異なる側面を持っていた。フランス租界の衛生局は公共の健康状態の範疇を超える部分にまでその影響力を及ぼ

し、城壁の取り壊しや貧民救済を行い、埋葬の方法などにも制限を加えた。これを引き継いだ中国の衛生局はその方針を更に強化し、技術・知識を採り入れるとともに、伝統的な衛生観念を混ぜ合わせて衛生改善に努めた。一方、日本租界における衛生局は、日本人を中国人と区別し、文明的な国民であることを示すために、科学的な衛生強化法を追求した。ただし、租界内の経済状態や住民の意志がそれを阻むこととなったともいう。

第4章（Brett Sheehan, "Urban Identity and Urban Networks in Cosmopolitan Cities"）では、対外的に開けた都市である天津における銀行業のコスモポリタンな性格を観察する。民国初期の中国においては、銀行・銀行家の活動はいくつかの都市に分散し、中心化されてはおらず、金城銀行やその創始者である周作民の活動を見ても、天津に限定されない都市間ネットワークの存在が明確に窺えた。また、資本家の編成は基本的に伝統的な同郷組織「幇」の形式をとっておらず、William Rowe(3)やBryna Goodman(4)、Marie-Claire Bergère(5)等が論じる漢口や上海のような、地域によるアイデンティティすらも持たなかったという。だがその一方で、軍閥との折衝においてのように、天津市民であることを強調する場面もあり、そこにまた彼らの意識の融通性が看取される。南京遷都以降、天津の地位は相対的に低下していくが、30年代になると、銀行家の活動は都市間のみならず都市と農村の関係にも注意を払っていくことになる。

第5章（David D. Buck, "Railway City and National Capital"）は南満洲鉄道の拠点として、満洲政権の首都となった長春の歩みを辿る。日清戦争前まで小さな町でしかなかった長春は、ロシア・日本による鉄道建設の過程で発展した。しかし、ロシアは長春をさほど重視しなかったため、大きな発展を遂げたのはむしろ、日本がロシアの経験を踏まえ、ヨーロッパの都市計画理論を学び、その導入を試みたことより始まった。後藤新平のプランに基づいて、鉄道駅の南側に格子状の道路網が建設され、長春街の東部に商業区域、西部に住宅区域というゾーニングが行われた。1932年に満洲国の首都「新京」となると、その翌年には国都建設局が設置され、大同広場とそこから放射状に延びる大通りが造られ、佐野利器によって水道網を始めとするインフラの整備が行われた。以降長春の人口は急速に膨れ上がり、百万都市へ向けた更なる改善が進められるのである。

第6章（Kristin Stapleton, "Yang Sen in Chengdu"）では、成都における楊森の都市計画について論じる。楊森は新政期には下級官僚として保路運動に参加したが、辛亥革命後雲南へ渡った。その後軍を率いて四川に戻ると、都市建設の技術者を伴い、1924年、成都に居を構えて改革に乗り出した。彼の政策は都市インフラの充実に主眼を置いており、辛亥革命以降振るわな

かった商品博覧会を復興させ、中国平民教育促進会に資金を提供して識字率の向上を図り、運動場の建設を行った。また道路を舗装・拡張し、新たに商業街を切り開いた。地元の有力者たちは政策を基本的には支持したが、儒教的伝統を守る姿勢は堅持しており、道路拡張事業においては、商人層と共に反対を唱えたが、楊森ら軍閥の財源は成都の外にあったため、妥協が図られることはなかった。この強硬な姿勢は住民の反感を多く買い、翌年出兵して成都を去ると、それを喜ぶ者が少なくなかったという。

第7章（Liping Wang, "Tourism and Spatial Change in Hangzhou, 1911-1927"）では近代に観光都市として変貌を遂げた杭州の歩みを跡付ける。清代において、杭州は手工業の都市として発展していた。杭州は唐宋以来「西湖」を訪れる文人たちの拠点ともなっていたが、湖と街は厚い城壁で隔てられており、その相互関連は稀薄であった。街には繁華街があったものの、それは廟を中心とした、都市内部あるいは都市と農村の関係上における発展の結果以上のものではなかった。しかし、太平天国の乱以降杭州が衰退してゆくと、20世紀初頭には鉄道を通じた上海との関係の中で、再びその地位を見出していくことになる。城壁を取り壊し、従来満洲族の居住していた区域に近代的な施設が立ち並ぶ「新市場」を開くと、観光客—それは主として上海から来るのだが—を取り込み、西湖遊覧の伝統と近代産業を並置するべく、都市の空間構造を変容させたのであった。

第8章（Madeleine Yue Dong, "Defining Beiping"）は南京政府時代に首都の地位を失った北平（北京）のアイデンティティの模索をめぐる都市建設の様子を描く。民国初期、首都であった北京の都市建設では、帝政と決別した新しい首都の表象に重点が置かれた。紫禁城や天壇など、従来は特定の人間のみ入ることのできた場所が公共的空間として開放され、レジャーや教育、運動などのために使用されることとなった。また、国民政府は革命の記念碑を立てようとしたが、これは市民の支持はあまり得られなかったという。しかし1928年以降は、北平はその首都という枠組みを除かれ、むしろ伝統文化の象徴としての都市の建設を目指すことになった。産業・交通共に未発達であった北平では、都市の範囲の拡大と鉄道網・道路網の整備が行われ、旅行客を惹きつけ、中国の伝統文化を世界に理解させるため、ホテルや劇場などのサービスが充実させられた。30年代になると、様々な方面において西洋化と伝統文化の矛盾が論じられたが、北平は中国的都市の代表としての道を選ぶことになった。

第9章（Charles D. Musgrove, "Building a Dream"）では前章の北京に代わって首都となった南京の建設を描く。南京は太平天国の乱のために壊滅的な打撃を受けたが、首都として全く新しい都市の建設を希求する国民党

にとっては、それはかえって好都合であった。ナショナリズムを高揚する教育が重視され、また世界の近代的首都のプランの分析・研究がなされた。その一方で、伝統的な建築様式や都市プランも採り入れられた。ゾーニングには特に注意が払われ、住・商・工の区分けがなされた。また中央の行政機関を紫金山に配置することが提案されたが、財政的な理由により後者は実現しなかった。建築においては、中洋折衷のスタイルが世界に冠たるものとして採用されることになる。ただし、これらの都市建設を通じて市民を統制・支配しようとした国民党の目論みが現実的には不十分なものであったことを、著者は同時に指摘する。

第10章（Stephan R. MacKinnon, "Wuhan's Search for Identity in the Republican Period"）は武漢におけるアイデンティティの形成に関する論考である。革命の伝統、広大な面積を有する武漢では、政治的には漢口・武昌・漢陽という三つの都市からなっていたが、内陸で最も近代的な都市としての統一された自意識が生まれていた。清末、張之洞の新政、下関条約に基づく開港、鉄道の敷設によって武漢は急速な発展を経験した。革命によって荒廃したが、1927年に広西軍閥に占領されるまで、企業の民営化と交通の整備、建築ブームのもとに復興を遂げ、30年代になると、農村からの人口流入で街は膨れ上がり、外国貿易によって更なる発展を遂げた。1938年に抗日戦争のための本拠地となると、マスコミ・大衆文化はにわかに盛況を呈した。その中で政治の中心としての武昌、軍需物資供給の中心としての漢陽、倉庫及びマスメディアの中心としての漢口という分業構造をもった武漢の統合が進み、国民アイデンティティの形成を促したと結論づける。

第11章（Lee McIsaac, "The City as Nation"）では重慶が採り上げられる。民国期、四川には軍閥が割拠しており、1937年に国民政府が重慶に首都を置いたときでさえ、中央政府の力は依然弱かった。重慶の近代化政策は、四川における弱い地位を克服し、統治の正当性を確立しようとしたところにその特徴がある。重慶の地形は山がちで街は狭く、人口は稠密であり、貧困と不潔さは長江下流からの避難民の蔑視の的となり、「近代的な」長江下流の人々と土着の四川人という二つの集団が自然と形成されて行った。1939年、国民政府は重慶の改革に着手することになるが、そのメンバーの大部分は四川以外の華中・華南人によって構成され、そのため成果も表面的なものにとどまった。そして、そこに見られる地域間・階層間の意識の乖離や多層性は、まさに中国社会の縮図とも言うべきものであったという。

第12章（Jeffrey N. Wasserstrom, "Locating Old Shanghai"）では、近代上海の研究について方法論的な考察を行う。研究者の間では、上海が中国でも特殊な都市であるという「上海例外主義」が広く行き渡っている。そ

こで、この上海例外主義には五つのアプローチの仕方があることを見た上で、それぞれに検討を加える。(1)上海は西洋によって創造されたとする「上海非中国説」の穏健なものと(2)その極端なものがあるが、これら二つは上海の中国的な部分を捨象してしまう。(3)上海を「もう一つの中国」として見る方法があるが、これも全国で統一的になされた改革について軽視する傾向がある。それらの問題を考慮に入れた(4)折衷的な立場もあるが、これは上海を一つの実体と考えるという誤りを犯すため、(5)上海を多元的な部分の集合として捉える方法が重要であると主張する。

以上、各章の内容を非常に簡単ながら要約してみたが、すでに第1章と第13章で述べられているように、本書はそれぞれの都市の歴史的背景や独自の構造に基づいた独特の都市の建設に着目しつつ、その一方で中国全体に共通して見られる大きな潮流を概観することに成功していると思われる。

個別的な論点として非常に興味深かったことが、杭州や北平の例で描かれているところの「見せるための都市」というものである。古代における都市計画とは支配者の理念の表現に他ならなかったが、近代以降、被支配者つまり都市住民の便宜を視野に置くようになったのは、これまでに見てきたとおりである。だがその潮流の中において、住むための空間としてではなく、見せるための観光資源として、また伝統を表現する場所として都市を再建することは、どのような論理あるいは心性に由来するものなのか。この点については、上の二つの論稿では近代ナショナリズムから説明するのみであったが、その一方で古来より受け継がれてきた都市観念もまた横たわっているのではないかと漠然とながら考える次第である。

支配者と被支配者について更に言及すると、当然ながら前者の史料が多く存するため、視点が限られることはある程度避けられない。しかも清末から民国にかけては社会変動が大きく、対象となる都市から見て支配する側が「他者(外国にせよ外省にせよ)」である場合がしばしばであったため、視点のズレはより深いものとなる。物質的・可視的な都市計画や都市建設について論じるときは、そのズレの意味はさほど大きくはないかもしれないが、重慶の例で見られるようなエスニシティなどの意識の問題を論じるとき、一面的な印象が顕著になってしまう。重要な分野であるだけに、より丹念な史料分析を行っていく必要があるだろう。

同様のことは、都市におけるアイデンティティの問題についても言える。本書の副題にも含まれているように、それは非常に重大なテーマであるのだが、各自の定義と方法に少なからぬ相違があるのではないだろうか。階層による区分、地域による区分はいずれも有力な方法ではあるが、その接点に当

たる部分の合理的な説明は非常に難しい。具体的には、コスモポリタンと性格付けられた天津の銀行家が天津市民であることを主張するとき、それを「融通性」という表現で片付けられるのか、人口流動の激しい近代の武漢において、固定的な武漢アイデンティティなるものがどれほどの範囲で通用するのか、また南京や北京におけるアイデンティティは、国民としてのものなのか、市民としてのものなのか、といった一筋縄では行かない問題が浮かぶのである。

各著者が各々の関心に基づいて論じているため、一つの書物としては散漫な印象が拭い去れないのは仕方がなく、そこは多様性と表裏一体であると考えるしかあるまい。それぞれのより深い分析は個別の論文・著書を参照するとして、むしろ、日本でもほとんど研究の進んでいない都市についても、出発点ともなるべき論稿を提供していることを高く評価すべきであり、近代中国都市の理解のための手引書としての役割は十二分に果たされていると思われる。

註

(1) G. W. Skinner ed., *The City in Late Imperial China*. Stanford University Press, 1977. (一部邦訳：G.W.スキナー著、今井清一訳『中国王朝末期の都市－都市と地方組織の階層構造－』(晃洋書房、1989年)。

(2) すべてを列挙することはできないが、ここ数年における代表的な著作として、高橋孝助・古厩忠夫編『上海史――巨大都市の形成と人々の営み――』(東方書店、1995年)、陣内秀信・朱自煊・高村雅彦編『北京――都市空間を読む――』(鹿島出版会、1998年)、天津地域史研究会編『天津史――再生する都市のトポロジー――』(東方書店、1999年)、小浜正子『近代上海の公共性と国家』(研文出版、2000年)、日本上海史研究会編『上海――重層するネットワーク――』(汲古書院、2000年)、高村雅彦『中国江南の都市とくらし――水のまちの環境形成――』(山川出版社、2000年)を挙げておく。

(3) William T. Rowe, *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1796-1889*. Stanford University Press, 1984, William T. Rowe, *Hankow: Conflict and Community in a Chinese City, 1796-1895*. Stanford University Press, 1989.

(4) Bryna Goodman, *Native Place, City, and Nation: Regional Networks and Identities in Shanghai, 1853-1937*. Berkeley, 1995.

(5) Marie-Claire Bergère, "The Shanghai Bankers' Association, 1915-1927: Modernization and the Institutionalization of Local Solidari-

ties." In *Shanghai Sojourners*, ed. Frederic Wakeman, Jr. and Wen-hsin Yeh. Berkeley, 1992.

(Joseph W. Esherick ed., *Remaking the Chinese City: Modernity and National Identity, 1900-1950*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000, x+278pp.)